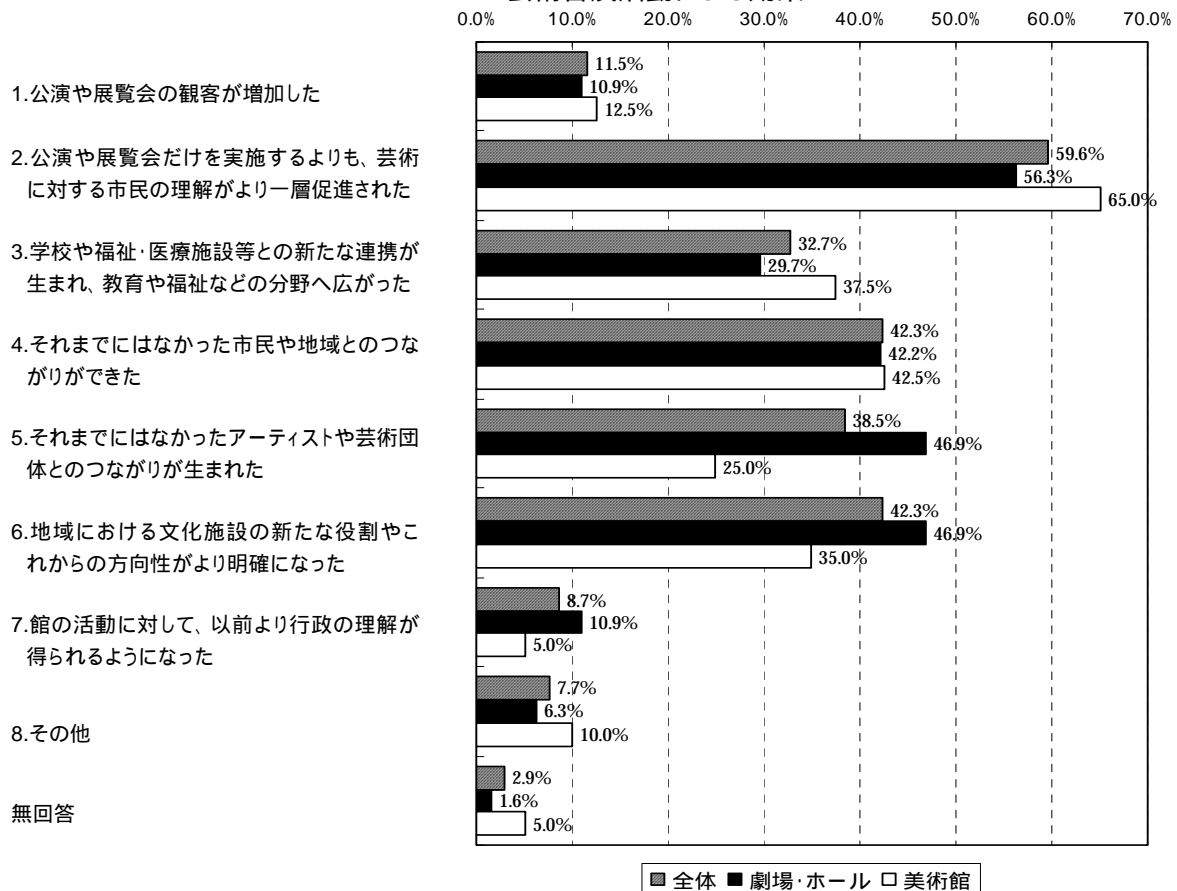


芸術普及活動の意義と これからの地域文化施設の方向性

ここまで、地域文化施設における芸術普及活動の導入の背景や経緯、事業の内容と特性、運営のあり方などについて整理してきたが、芸術普及活動は、地域文化施設にとって、どのような意義や効果を有しているのだろうか。また、そうした普及活動の意義を視野に入れたとき、これからの地域文化施設はどのような方向性を目指していくべきだろうか。

最後に調査のまとめとして、芸術普及活動の意義や効果と、地域文化施設のこれからの方向性について、考察をおこなった。

◎ 芸術普及活動による効果



(%の母数:全体 104件、劇場・ホール 64件、美術館 40件)

1. 芸術普及活動の効果と意義

アンケートの調査結果では、芸術普及活動の効果として、芸術に対する市民の理解が促進されたことをあげる回答がもっとも多く、次いで、市民や地域とのつながりができたこと、地域における文化施設の役割や方向性が明確になったとすることが多かった。

事例調査でも、概ね同様の成果を指摘する担当者が多かったが、芸術普及活動は、公演や展覧会事業では得られない、あるいは質の異なる効果を地域や市民にもたらすポテンシャルを有している。ここではそれを以下の5つの意義や効果に分けて整理した。

(1) 地域や市民との新たなつながりと公共性

まず一点目は、芸術普及活動によって、それまでとは異なる地域や市民とのつながりが生まれること、さらには、それが基点となって地域の文化環境づくりが促進されるということである。芸術普及活動は、文化施設の間口を広げ、地域や市民との垣根を低くする役割を担っているといえる。

公演や演奏会、展覧会といった事業だけを実施していたのでは、文化施設のメッセージは、もともと芸術に興味のある市民にしか届かない。普段は芸術や文化に縁のない市民、あるいは文化施設に出かけたくてもそれがかなわない人々、そして、自ら文化施設に足を運ぶことの少ない子どもたちに、施設の側からアプローチすることによって、文化施設が対象とする市民の範囲は格段に広がる。公共の文化施設が市民の税金によって運営されていることを考えると、可能な限り幅広い市民へ働きかけることはむしろ当然のことであり、そういう意味で、芸術普及活動は文化施設の公共性を確保するための手段とも言える。

(2) 観客の開拓や育成

こうした地域や市民への働きかけは、地域の文化環境を育み、

◎ 事例調査、研究会の発言から

[地域の文化環境づくり]

- ホールとアーティストで演劇におけるパートナーシップを結べるようになってきたが、これは芸術普及活動で、しかけづくりと横のつながり、地域への還元を考え続けてきた大きな成果(仙台青文センター)。
- アウトリーチの結果、知らないうちに幅広い年齢層が芸術文化を学べる環境ができた(小出郷)。
- こういう時代だからこそ、ホールや美術館の職員は舞台の後ろに控えているだけではなく、様々な事業展開の方法を考え、地域社会との多角的な関係構築を行うプロフェSSIONALになるべき(熊倉)。

[多様なアクセスと“広場”としてのホール]

- 裏方をやりたい人、舞台に出たい人、会館にひとこと言いたい人が、いつでも、どこからでも主体的に参加できる、「循環する構造」のあることが重要(越谷)。
- ホールと市民の関わりを作ること、芸術をツールとした関係性を作ることがこれからのホールの役割。そのために様々なアクセスを用意し、市民が選べるようなしくみが必要(仙台青文センター)。
- どういうメッセージを市民に伝え、どういふふうに門戸を開いていくか。つまり、市民が集まれる広場づくりがホールの役割(坪能)。

[観客を育てるアウトリーチ]

- 美術館のコア・サポーター的な市民を新規開拓することができた。来館の少ない客層である40、50代の男性もターゲットとしたい(岡山県美)。

- 最大の効果はIFSメンバーが子供会を率いてワークショップに参加するなど活動の間口が広がっていること(佐倉市美)。
- リコーダーワークショップにともない、コンサート入場者も増加。600名になれば、採算的に作曲委嘱も可能になり、アウトリーチの先に創作活動が見える(小出郷)。

[子どもから広がる観客層]

- 子どもへの普及活動によって、一緒に来館する大人にも美術館が日常的なものとなり、市民の理解が促進され、さらには市長や議員の好意的な見方にもつながっている(浜田こども美)。
- 開館後5年で、市内の全小学生が美術館の来館経験者となり、両親や祖父母も一緒に来るようになった(浜田こども美)。
- シアタープロジェクト事業は、将来的な演劇ファンを育てること(厚木)。

[目に見える子どもの変化]

- 子どもたちと接していると、「一人ひとり違っていいんだ」ということを、子どもたちがわかり始めたことが手に取るようにわかる(刈谷市美)。
- 子どもは一人一人感じ方が違う。作品を基点にして自分が何を思ったのか、それはなぜかを話してもらい、それは全て許容する。作品解釈は多義的で、情操教育の優れたツール(岡山県美)。
- 学校とホールのやり方にはギャップがあるが、ワークショップで子どもが目を輝かせていると、先生の姿勢も変わる(小出郷)。
- 最初は学校も手探りだが、ワークショップに参加している子どもの顔が活き活きすると、先生方からも評価される(厚木)。

[アーティストと教育]

- ジュニアプラス指導の先生は、「みんなに100点をあげる」という姿勢(小出郷)。

結果的に劇場や美術館の新しい観客を開拓、育成することにつながっていく。アンケート調査では観客増があったと回答したところは限られていたが、事例調査では、芸術普及活動が、さまざまな形で観客育成や拡大につながっているという指摘が多かった。

ワークショップなどの芸術普及活動は、従来型の鑑賞事業よりも、深く、そして身近に芸術を理解、体験することにつながるという点も、観客や聴衆の育成、さらには芸術のよき理解者や文化施設の支持者を増やすためには有効だと考えられる。

(3) 子どもや青少年に対する成果

芸術普及活動には子どもや学校を対象にしたもの多いということは、既に何度も述べたとおりである。従来から、いわゆる学校公演や鑑賞教室といった取り組みが行われ、ある程度の成果をあげてきた。しかし、今回の調査で取り上げた子どもや学校向けの普及活動が、そうしたものと違っている点は、少人数を対象にしていること、アーティストや作品にじかに触れること、ワークショップやワークブックなど体験・鑑賞のための手法やツールが用意されていること、そして必ずしも演劇や音楽公演の鑑賞だけを目的としていないこと、などである。

こうした普及活動は、子どもや青少年の教育にどのような効果をもたらすのか。それを明確に定義することは難しい。しかし、現在の学校教育の枠組みの中だけでは提供できない何かを子供たちにもたらすことは、芸術普及担当者の話を聞けば明らかである。それは、情操教育や個性、表現力の育成だったり、ものごとを自分の目で見て判断し、意見を述べるといった自主性、あるいは、自分とは異なる意見や考え方を受け入れる柔軟性といったものかもしれない。

米国の芸術普及担当者は、学校の芸術教師が芸術を教えることと、アーティストが直接子供たちと接することの最大の違いを「学校の先生は点数をつけるのが仕事だが、アーティストは点数をつけなくてもいい」と説明している。

教育問題の改善は、日本の大きな課題のひとつであり、そのため、教育指導要領の改訂、総合的学習や鑑賞の時間の導入など、日本の教育環境は大きく変化しようとしている。地域文化施設の取り組みが、そうした教育問題の直接的な解決策になるとは思えないが、部分的、あるいは補足的ではあるにせよ、芸術普及活動が子どもや青少年の教育面で効果を有しているということは、今回の調査結果からも明らかであろう。

(4) アーティストや芸術団体にとっての新しい役割

芸術を創造すること、あるいはそれらを表現すること、アーティストや芸術団体の職能をひとことで表すと、おそらくこういったことになるのではないだろうか。しかし芸術普及活動におけるアーティストの役割は、この範囲にとどまらない。むしろ、芸術の創造や表現行為とは別の形で、芸術の持つ力やポテンシャルを市民に伝え、体験してもらい、あるいは芸術を媒介にして、公演や展覧会とは別の形の社会サービスを提供する、といったことになるだろう。

もちろんすべてのアーティストや芸術団体がこうした活動を展開すべきだとは限らない。しかし、芸術活動が、舞台上やギャラリーの中だけで行われていたのでは、芸術に関心のある観客や聴衆、つまり一部の市民を対象としたものにとどまってしまう恐れがあることも、また事実であろう。芸術普及活動は、こうした枠組みを取り払い、アーティスト自身の社会的な役割や活動の場を広げる可能性を有している。学校や福祉施設を訪問したアーティストの中には、ステージの上や美術館以外のところで、自分の専門的職能を公共的な形で活かせる場のあることを発見するアーティストもいるだろう。そういう意味で、芸術普及活動は、文化施設だけでなく、アーティストや芸術団体にも新しい役割や社会的な意義を与える可能性を持っているといえる。

さらに、それを受け手の側から見ると、普及活動はアーティストをより身近な存在として感じる貴重な経験となる。たとえば、教室の中で、目の前で初めて聴いたバイオリンの音やオペラ歌手

- 音楽は元々広い存在。聴こえる音楽を通じて、その向こうにある聴こえないもの(=感動)を味わうことができる。これは、人間形成に関わる何かエネルギーのようなもの(吉澤)。
- 教育と演奏は、創造という範疇の中では同じこと。著名な音楽家は、バーンスタインのように本来の姿は教育家でもある。本来の教育(education)とは、内になるものを引っ張り上げるという意味(吉澤)。
- 子どもたちにとって、演劇は、創造する力を育て、表現する力をあたえる手段として有効(横内)。
- ワークショップで学校に行くときは、あくまで演劇のプロとして行く。我々は教育者ではないので、決して先生にならないようにしている。このスタンスがうまくいっている秘訣かもしれない。休憩時には劇団員と子どもと一緒に遊んでいる(横内)。

[アーティストの意識と公的活動]

- 地域創造の音楽活性化事業の登録アーティストには、アウトリーチが音楽家の使命だと考えるようなアーティストもいるが、全体的にはアウトリーチを理解するアーティストは少数派(小出郷)。
- ワークショップや演奏会に2年目以降も同じアーティストに依頼すると、アーティストの方から、「次は学校を回ろうか」という提案が出てくる(小出郷)。
- アーティストの中に公共的な意義を持つ人は非常に少ない。偉大なアーティストは、現場でのコミュニケーションをととても重視している人が多い(坪能)。
- 演劇人がワークショップに携わることは、「自分の芝居をあらためてみつめ直すこと」と「仕事として」という2つの軸がある。演劇という技術を使って、劇団や劇団員にとっての仕事ができるというのもワークショップの位置づけ(横内)。

[時代や社会変化への対応と普及活動]

- どの美術館も、現実に集客し、採算をとる必要に迫られている。独立行政法人への動きなど、時代の変化を視野に入れると、普及活動に新しい視点を導入する必要がある(山本)。
- 普及事業を実施することによって、美術館の外のこと、学校のこと、親子のことなどがよくわかるようになった(岡山県美)。
- 財政状況が厳しい中、公共が文化事業をおこなう意義や理由を明確にするためにも、普及型事業で大きな地域還元が実現していることを示していかなければならない(仙台青文センター)。
- 社会や美術界の動向を考えれば、これからの美術館に教育普及は必然。世界的な動向でもあるし、日本の美術館でも認知されている(中山)。

[観客・市民の視点の導入]

- 美術館以外の人と普及活動を立ち上げることで、外から美術館活動が相対化され、サービス施設として受益者還元をしなければならぬという、観客向きの意識が、館内にも出てきた(岡山県美)。
- 美術専門家の価値観ではなく「鑑賞者の目」で見た展示、市民が自分なりの楽しみを見つけられる場所としての常設展の充実、子どもだけでなく大人向けの普及事業の導入が今後の目標(名古屋市美)。
- 事業は「作品のアセスメント」、つまり「この事業を実施した場合の住民の評価は」と考えることが重要。この事前評価を行うことで、理事会や地域の理解も得やすく、スムーズに事業を実施できる(門川)。
- 文化施設の公共性は、作品を「つくる」市民、「鑑賞する」市民の両方に対するものとしてとらえなければならぬし、「つくること」と「鑑賞すること」は相互関係の中で成り立っている(刈谷市美)。

の圧倒的な声の存在感は、アーティストという生身の人間と一体となって、子どもの中に記憶されるだろう。そうした行為の積み重ねの上に、アーティストというプロフェッショナルに対する理解や敬意も生まれ、その延長線上で、芸術や文化の必要性に対する社会的な理解も成立していくと考えられる。

(5) 文化施設内部や行政組織に対する効果

芸術普及活動の持つ効果として、最後にもうひとつ指摘しておきたい。文化施設の運営組織そのもの、あるいは行政当局など、内部組織に対する効果である。事例調査の中には、普及活動を実施することによって、それまで公演や展覧会の内容だけに目が向いていた組織が、聴衆や観客、あるいは子どもや一般市民の方に視線が向くようになった、と指摘する担当者がいた。言い換えれば、アウトリーチ活動に取り組むことによって、地域や市民にいかにサービスを提供していくか、あるいは文化施設の持つ資源をいかに地域に還元していくか、といった発想を、文化施設が持てるようになった、というのである。

こうした普及活動の内部に向けた効果は、文化施設だけにとどまらず、所管する自治体にも及んでいる。学校や子どもを対象とした普及活動、あるいは福祉や医療の分野も視野に入れた事業によって、従来の文化行政の枠組みとは異なる尺度で文化施設の役割を認識できるからである。すでに「芸術普及活動の運営」の項で触れたように、そのことで、予算増に結びついたケースもあった。

行財政改革の推進、情報公開制度や行政施策に対する評価制度の本格的な導入、税収減にともなう文化予算の削減、国公立美術館の独立行政法人化など、文化施設を取り巻く環境は急速に変化している。これまで、文化行政の一環として、公共予算の裏づけによって成り立っていた文化施設も、これからは独自に活動の基盤を作っていかなければならない時代だと言ってもいいだろう。

文化施設の受益者である「市民」の側にたった運営やサービ

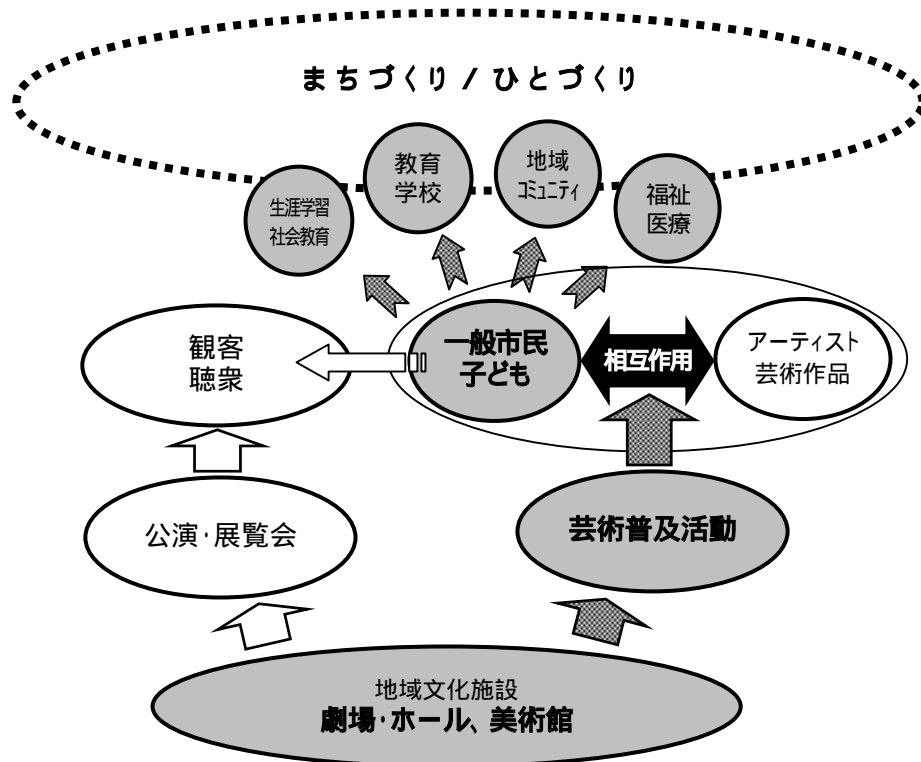
スの提供、そして所管する自治体の理解の促進、このふたつは、いずれも公共文化施設の存在基盤の根幹をなすものであり、芸術普及活動は、その基盤を確固たるものにするためにも重要な役割を担っているのである。

- 美術館は重要な時期にさしかかっており、従来の一方的な展示ではなく、「見るばかりではなく、語ろうよ」という場所づくりが重要(名古屋市美)。
- 公演はやはり舞台の上と下で対峙してしまう部分もあるので、より日常的な形でダイレクトに人々と関われる芸術普及と2本立てで活動を行うことで、相乗効果生まれ、芸術環境も変わっていく(松井)。

2. 芸術普及活動とこれからの地域文化施設の方向性

こうして見てくると、芸術普及活動は、実に幅広く、また多様な可能性を有した取り組みであることがわかる。地域文化施設を基点とした芸術普及活動の広がりを、公演や展覧会事業と比較する形で模式化したのが下図である。

◎ 地域文化施設における芸術普及活動を媒介にしたまちづくり、ひとづくり



[地域・市民と芸術との橋渡し]

- 社会とアートあるいはアーティストを結びつけるのが美術館の役割(名古屋市美)。
- 美術作品やアーティストとのつながりをつくるのが普及担当の役割(刈谷市美)。
- 地域の要望とアーティストの橋渡しをすることがホールの大きな役割であり、そうした情報センターとして機能できるのも、5年間のアウトリーチ活動の成果(小出郷)。

[まちづくり、人づくりと芸術普及活動]

- 演劇を社会的に役立てていこうという思想が求められる。演劇というのはこういうこともできるという発想を職員が持っているかどうか重要なポイント(世田谷パブリック)。
- アウトリーチやワークショップによって、人々や街の中で小さな変化が同時多発的に起こっていく。劇場で働いている人間が一番考えなければいけないのは、そういった小さな変化をどれだけ創り出せるかということ。公演の内容も重要だが、公演の先にあるもの、つまりどれだけ演劇が地域に影響を与えるかという面も、同時に考えていくべき(松井)。
- 2町4村の広域組合で運営しているが、アウトリーチを積極的に展開することで、ホールは2町4村みんなのものだという意識が生まれた。アウトリーチは町村合併の潤滑油にもなるし、まちづくりの核になる(小出郷)。
- 「文化は人」と言われることで、「人材育成」に予算がつく。まちは人がつくるものであり、都市政策は結局人づくりである。感性豊かな人々が輩出されることで、人々はこのまちに住み続けたいという希望が出てくる。このまちに住み続けたいという共感形成ができる環境づくりをすることがホールの役目。30年、50年先のまちづくりを考えた種蒔きが、芸術普及活動である(仙台青文センター)。

これまでの公共文化施設は、概ね、芸術の享受者としての観客や聴衆に対するサービス、そして自ら文化活動を行う市民に対する施設や機会の提供、という二つの枠組みの中で運営されることがほとんどだった。公共ホールで言えば、前者が自主事業(鑑賞事業)、後者が貸しホール、美術館では前者が(常設/企画)展覧会、後者が市民ギャラリー、といったものである。そうした運営の中では、「公共性」は、芸術(作品)や文化の公共的・社会的価値、あるいは施設の使い手に対する「公平性」の中に求められていた。それは、芸術や文化に関心を持つ層の中での公共性に限られていたともいえる。芸術普及活動は、もうひとつ大きな枠組み、すなわち上記の活動だけでは対象とならなかった市民も含めた公共性を、文化施設にもたらず可能性を持っている。

もちろん、公演や展覧会事業、あるいは市民への施設提供なども、引き続き地域文化施設の重要な役割であることには違いない。芸術普及活動は、そうした活動と切り離して考えられるべきものではなく、むしろ、公演や展覧会事業をより効果的なものにするためにもきわめて有効である。インタビュー調査やアンケート調査の中で、芸術普及担当者の多くは、これからの文化施設の役割を、市民と芸術やアーティストをつなぐこと、あるいは、地域に文化施設の活動を還元していくこと、と述べている。芸術普及活動は、公演や展覧会とは別の形で市民と芸術やアーティストをつなぎ、文化施設の活動を地域に還元していくものである。そして、何より大きな特徴は、それが「文化行政」という枠組みだけではなく、教育や福祉、まちづくりといった地域全体、市民全体に対する社会サービスに結びついていく点であろう。

過去10年、20年の間に、全国各地に整備された劇場やホール、美術館といった文化施設が、地域にとって真に意味のあるものになっていくためには、芸術や文化を軸に、地域のまちづくりやひとづくりにどのように参画していくことができるか、が問われることになるだろう。そうした視点に立つと、芸術普及活動は地

域を創造する取り組みとして、これからの地域文化施設にとってなくてはならないものだといえる。